

類想句の後始末

山田みづえ

コンピュータ・俳句が生まれても不思議ではない世の中。類想・類似・類型の句が多くなるのは必至のことかもしれない。

日進月歩、いや秒速で増殖しつつある情報過多、創作側にとつては細分多岐化する作業に加速度的に衰えてゆく記憶力という傾向で、単純に考えても類想句は増えてゆくが減りはしない。「俳句をこの年になって始めました」という人が多い。いわゆるカルチャー俳句人。その句を見ると、その過去経歴に俳句が位置していた情況、俳句認識の一般性が客観的に見えてくる。俳句は芭蕉・蕪村・一茶とまりで、現代俳句はほとんど認知されていない現実、句作の際の季語・季題による発想・連想はほとんどコピーに近いワンパターンで俗っぽく、そぞろ虚しい思いにさせられる。

具体的に言うと、たとえば、赤のまま、犬蓼の花となれば、大半が幼いころのままごとへ想い出が走ってゆく可愛いらしさ。鳩や雀となれば飛ぶか舞うくらいのあるきたちの表現が決まって出てくる。毎年、人は違いますがこの点はよく似ている。それを悪いとは言えないが、少々困る。それでも今まで俳句に無縁だった人の、どんな目的にせよ、俳句作りへ情熱を燃やす心の営みを疎かにには扱えない。

い。ここを出発点にして、まあ無限の可能性があることにしたいと希つているのである。

身を乗せて桜大根切りにけり 朝倉 和江
身を乗せて冬至南瓜を切りにけり R 子
朝倉さんの句は歳時記に載っている。桜島大根をこういうのか知らないが、よくわかる。

後者の句は冬至南瓜の大きさ、固さがわかって悪くはないが、類想だと本人が気が付いて引っ込めることにしたという。

落葉 積み狭庭も広くなりけり
落葉して隣家は近くなりけり
初雀 音符の如く地にこぼる
枝撥ねて 音符のごとし初雀
ほゝえみも言葉の一つ花菖蒲
ほゝえみも言葉の一つ年の暮

いずれも仲間句であるが、類想・相似などの典型だろう。いずれを佳しとするか、他にもよく似たのが俳壇にころころ存在するかもしれないとも思う。類想句はいくらでも出てくる。これを怖れて、うじうじと俳句をつくるな、構うことはない、まずおめず臆せず句作すべしと言いたい。むしろ、その後が問題である。先人の句に負けたと思ったら撤回、捨てればよい。何年も専一に俳句文芸を志してきた人は、だいたい頭の中で、抜く手も見せず、取捨選択してきたのだらうと思う。昔はカルチャー・センターなどないから、大半

は己が志に順つての独学だったと思う。結社に入っても入らなくても、作句過程を解剖分析をしないから分からないだけのことではないか。

あまり大きくないグループなどでは、時として、いい句、よき表現などが真似されて流行したりする。私の句を引用すれば、

菊・戴・逝きて・自在の父となりしか (昭33)
良きことばかり母に告ぐるや稲妻す (昭36)

この・点のあたりが二、三年「逝きて自在の父」とか「良きことのみを墓に告ぐ」などと他の人に使われて、喜ぶべきか悲しむべきか、学ぶは真似だから肯定したいし、大げさに言えば困ったこともある。感性に基づく表現は、時として通俗的というか一般の心情に訴えるから、共感を得て流行する。たとえば、かの有名な、「明治は遠くなりにけり」とか「昭和は永くなりにけり」などは現実であるし、誰が使ってもいいし、いけないとは言えないが、先達の秀句を踏み越えたときのみ、己れの句を背い得るので、それは良

識に図るべき問題なのである。

もう一つ、チカッと光る思いの経験がある。昔、句会で私の句に石川桂郎が文句をつけた。

柿食ふや不精たのしき女の日 みづえ

「女の日」ってのは、お客様の日ってことだろう。そんな句は俺にもあるぜ。すると石田波郷曰く「これはそんなじゃないよ」。桂郎氏ベロリと舌を出して無言。「鶴」にきて目の浅い私は、少し色なして桂郎氏を脱んでいたが、思わず微笑。この場合も女の日表現はいくらでも使える一例。母の日、父の日だって何も年に一度の行事の日ばかりの専用ではあるまい。そんなことを怖れず、自分の感性を磨いて、もっと自在暢達に表現、言葉に挑戦してもらいたい。

類想句とわかったら、比較分析して、欠点などサッとよくわかり、ここまで到達し得たとして、卒業し、脱皮し、次の無数の未知の句の下敷きにすればよいことである。その処理を自前のできることで、俳句作者としては常道なので、最近はその以前のまま、甘ったれているのが多いと私は考えている。

月刊

嵯峨野

主宰村山古郷

新会員募集

会費 (誌代送料共)
半年分 3,600円
一年分 7,200円
見本誌 600円

申込所 〒606
京都市左区松ヶ崎
木ノ本町19-16
振替・京都 1-28713

嵯峨野俳句会

東京支社 東京都武蔵野市
〒180 吉祥寺南町1-11-1